

## 中世吉田地域の形成とその歴史的前提

——新長谷寺に関する考察を中心に——

吉 江 崇

はじめに

平安京から京都への展開を考えるにあたっては、平安宮・京の内部変化を把握するとともに、その周縁地域の変質を多角的に描き出すことが不可欠で、このことについては、改めて述べるまでもなからう。また、「国王ノ氏寺」とされた法勝寺の造営を皮切りに、大規模な仏教儀礼空間が現出した白河地域や、新たに建てられた後院の周囲に院の近臣の舎屋が営造され、「宛如<sub>二</sub>都遷<sub>一</sub>」といわれた鳥羽地域に関する政治・宗教史的な分析が、こうした課題に答える上で、直接的かつ重要な視角となることについても、蓄積された先行研究の大きな成果を見れば、明瞭にわかる事実といえる。しかし、白河や鳥羽以外の郊外に目を向ける時、いまだ充分には把握されていない事象が多く存在していることにも気付く。周縁地域の変質を総体的に捉え、それを通じて平安京から京都への展開を論じようとするのであれば、院政期において政治・宗教的な拠点的位置にあった白河・鳥羽に収束されない側面についても、可能な限り注意を払う必要があると考える。

かつて筆者は、このような問題関心に従って、白河に北接する吉田地域を素材とし、その中世における展開過程を素描したことがある。<sup>①</sup>そこでは、一二世紀中葉の福勝院建立を契機として、貴族の邸宅や堂舎の林立する景観が出現したこと、建造された邸宅や堂舎の多くは、中世的な家の継承原理のもと、鎌倉期を通じて伝領されていったこと、こうした家的紐帯に基づく個別的・分散的な土地の領有形態は応仁の乱によって解体し、吉田兼俱による権威獲得への志向と成長してきた地下人層の「平和」への希求とが相俟って、吉田社による一元的・領域的な支配が現出し、こ

れが近世的な景観の基礎となつたと推測し得ること、などを指摘した。考察の対象は極めて限定的であつたが、ここで論じた変容過程を当該地域に特殊なものと思へるのではなく、時期や程度に多少の差はあれ、多くの郊外でも同様な変化が起こつたと見なすべきであらう。このような個別事例の集積こそが、周縁地域の変質を総体的に捉へる上で、不可欠な作業になることは間違いないと考える。

ところで、前稿においては中世における吉田地域の変容を大局的に捉え、周縁地域全般が持つ特質として示そうとしたために、論ずべくして漏れ落ちた事象も数多く存在した。なかでも、当該地域が展開していく上での歴史的前提については、史料的な制約もあつてほとんど触れることが叶わなかつた。吉田地域に建てられた邸宅や堂舎については、持ち主である貴族がそこで終焉を迎える事例が散見し、累代の墓が造営されるなど、いわば隱棲地的性格を有することにその特徴がある。そして、その地が隱棲地として開發されるためには、それ以前に系譜する宗教的特色が、少なからず影響を与えたと予想することも、さして難しいことではない。ならば、地域に内在する本来的な性格を把握することは、周縁地域の様相を理解する上で重要な課題とならざるを得ない。本稿では、前稿での不備を補う意味を兼ね、中世吉田地域が形成される際に基盤となつた様相について、具体的に探つていきたいと考える。このような目的のもと、史料的な制約はなおお認めないものの、いくつかの興味深い史料を提示してくれることになる新長谷寺（今長谷寺ともいう）なる寺院を、考察の主たる対象として設定したい。

吉田地域に所在した新長谷寺については、これまでほとんど言及されることがない。従つて、本論に入る前にごく簡単にでも概要を紹介しておく必要がある。新長谷寺の第一の特徴は、一五世紀後葉以降に全国の神社組織に多大な影響を及ぼすこととなる吉田社の、神宮寺として位置付けられた点にある。寺名からも推察できるところ、観音菩薩像を本尊としており、その存在は史料的には一三世紀初頭まで遡ることが可能である。応仁の乱の最中に灰燼に帰すもの<sup>(1)</sup>のままなく再建されたく、『拾遺都名所図会』など種々の地誌を参照すると、近世においては吉田社大元宮へ至る日降坂の途中に位置していたようである。近世には、洛陽三三所観音巡りの第五番に定められて人々の参詣を集めてきたが、明治の廃仏毀釈の中で、その命脈を閉じることとなる。甚だ不十分な概要ではあるが、これらの基本

的な事項をおさえた上で、早速、考察へと移ることにしよう。

## 一 新長谷寺縁起の検討

新長谷寺の初見史料は、一三世紀初頭成立の『長谷寺験記』巻下―二三、山蔭中納言得<sub>二</sub>聖人告<sub>三</sub>造<sub>二</sub>惣持寺<sub>三</sub>仏一事(以下、『験記』と略す)で、そこに掲出された惣持寺縁起の末尾に登場することとなる。「継子いじめ」と「龜報恩譚」を含むこの説話には、『今昔物語集』卷一九―二九、龜報<sub>二</sub>山蔭中納言恩<sub>三</sub>語を始めとする数多くの類話が存在し、『山蔭中納言説話』や「如無僧都物語」と呼ばれて説話研究では著名な話といえる。いくつかの類型を持つ「山蔭中納言説話」の中でも、惣持寺縁起の形態を有する説話に新長谷寺は現れるが、その中であって成立時期の最も古いのが『験記』であり、ここでは『験記』を中心とする縁起の検討から考察を始めていきたい。その内容は、およそ以下のときものである。

九世紀後葉の陽成天皇の御宇、父高房に随従して鎮西へ下向した幼少の藤原山蔭は、その途上、継母の語らいを受けた乳母によって、船上より海へ放り投げられてしまう。悲嘆にくれた高房は、千手観音像の造像を観音菩薩へ祈誓し、その結果、前日に高房が鶺鴒から命を救った亀の背に乗り、山蔭は無事に高房のもとへと戻ってくる。成人した山蔭は、父の後を承けて千手観音像の製作を志す。遣唐使大神御井を通じて唐へ霊木を求めたところ、御井は清涼山の麓で光輝く木を見つけ、皇帝の輸出の禁にあいながらも、長さ三尺六寸、周り四尺八寸の方形の梅檀香木を山蔭へもたらす。霊木を得た山蔭は、仏師を求めて大和国長谷寺に籠もり、夢告に従って長谷寺門前で出会った一四、五歳の賤しげな童子に造像を依頼する。約束に違わず山蔭の「洛陽東山吉田ノ亭<sub>今吉田社是也</sub>」を訪れた童子は、そこに設けられた仏所で観音像の製作に取り掛かり、期日である一〇〇〇日が満ちた日に、「長谷ノ観音ヤヲワスル〜」との声が二度まで空に響くと、「サカナキ行基カナ」と答えて仏所を蹴破り南へ去って行く。仏所には三尺の千手観音像が残され、供膳も全く手つかずだったことで、山蔭は長谷寺観音が童子に身を現じて造像したことを知る。山蔭の死後、仏所へ運ばれる際に霊木が逡巡した摂津国島下郡の地に、山蔭の子息らが惣持寺を建立し、寛平二年(八九〇)

に供養されて、長谷寺観音が造つた千手観音像が安置されることとなる。<sup>10)</sup>

ここまでが惣持寺縁起の主体を占める部分だが、問題の新長谷寺はその後日譚ともいふべき形で現れる。すなわち、山蔭は「此観音ヲ写シ造」つて仏所の跡に安置したのであり、これが「洛陽東山吉田ノ今ノ長谷寺」であるという。ここにいう「此観音」が、惣持寺の本尊となる千手観音像を指すことは文脈から明白で、『験記』が著された時代にあっては、新長谷寺の本尊は、惣持寺の観音像を模した像高三尺程度の千手観音像だったと見るのがよい。これに続けて『験記』は、「但彼納言建立ノ伽藍ハ類火ニ焼ト云トモ、一人聖人発心祈誓ノ為ニ、祇陀林寺ノ地藏ニ參籠ス。御帳内ニ音有テ、彼吉田ノ今長谷ヲ可シ造由夢思ノ告有テ、昔ノ跡ニ重テ当寺ヲ移シテ、并ニ祇陀林寺ニ塔ヲ立者也」と記し筆を置く。ここからは、長谷寺観音の影向の靈地に建立された新長谷寺は早い時期に焼失してしまい、祇陀林寺に籠もつた聖人によって、「当寺」<sup>11)</sup>を移して再建されたことが判明する。『験記』の中には、長谷寺観音が「サカナキ行基カナ」と答える場面があることも興味深く、長谷寺観音と行基信仰との連関が垣間見える点にも注目しておきたい。こうした個々の事項を追究することが、本稿にとつて重要な視角になると思われるが、これらに関する考察は後に回すとして、さしあたり本章では、近世に著述された新長谷寺縁起にも目を向けることで、縁起の作成と在地の信仰との関係について、もう少し検討を加えておきたい。

天理大学附属天理図書館吉田文庫には、吉田社に伝来した四つの新長谷寺縁起が所蔵されており、その一本は『験記』の惣持寺縁起に大きな影響を受けたものである。<sup>12)</sup>「惣持寺縁起型」とでも称すべきこの縁起は、『験記』と同じ内容を記した上で、春日神が白翁に現じて頂上仏と宝冠の阿弥陀仏を授けたこと、長谷寺の石座を分かつて四尺四方の瑪瑙の座を造り、そこに本尊を安置したことなどを記す。頂上仏と宝冠の阿弥陀仏が見えることから、この縁起の作成時には、本尊が十一面観音像と認識されており、長谷寺の観音像に接近している様子を窺える。そして、これに続けて吉田社の由緒を載せ、「新長谷寺も同じ卿の建立なれば、すなはち吉田の神宮寺とす」と、山蔭の建立を媒介にして、神宮寺としての由来を説明する。他にも、東三条院による長保三年（一〇〇一）の再興、良源の弟子、源信による供養、永延元年（九八八）の吉田祭勅祭化と天皇行幸に基づく隆盛、吉田社と新長谷寺の建立でもたらされ

た山蔭の子孫の繁榮、などが述べられる。「惣持寺縁起型」新長谷寺縁起の特色は、『験記』の記載を基本に置きつつ、そこに新たな説話を付加して、吉田社神宮寺としての立場を説明しようとしたことにあると考える。

四本ある吉田文庫所蔵の新長谷寺縁起の中で、「惣持寺縁起型」とした以外の三本に関しては、全く同じ内容を持つものである。<sup>(15)</sup>春日神が鹿島社から春日を経て吉田社へ降臨するまでの由来を冒頭に配することから、「吉田社縁起型」とでもいふべきこの縁起では、吉田社の由緒を詳述した後には、『験記』の記述内容をかなり簡略化して載せている。東三条院の再興記事なども含まれており、個々の記事の掲出順こそ違え、全体としては「惣持寺縁起型」とさほど変わりはしない。しかし、「又頂上仏・宝冠の弥陀は、是かすかのさつけさせ給。因レ茲、迷忘の衆生、神仏二見の想を破り、ひろく一心の源にかへるへし」という神仏習合的な効力や、「惣して無数の菩薩の中に観音の功德ことにすくれ、塵刹の衆生の中に、我國の因縁もつともふかし」のごとき観音の靈力など、「惣持寺縁起型」が触れない記述も見える。『験記』の内容を簡略に記すのと反比例するかのようには、かくのごとく現実の信仰的要素が強く反映されており、これらを勘案すれば、吉田文庫所蔵の「吉田社縁起型」と「惣持寺縁起型」とでは、相互に影響を受けてはいるものの、源となった話は相違していたと見るのが妥当である。

ところで、これら吉田社伝来の諸本の他にも、新長谷寺縁起は、靜嘉堂文庫と四天王寺国際仏教大学図書館恩頼堂文庫<sup>(16)</sup>とに一本ずつが蔵されている。前者は、吉田文庫の「惣持寺縁起型」と同型式だが、「新長谷寺縁起 二巻之一 錦所蔵「山田本」」との外題を有しており、これと対になる別の一巻があったことが注目に値する。現存本が、細部に至るまで「惣持寺縁起型」と等しいことを考慮すると、外題から窺える別巻は、「吉田社縁起型」の形態をとった可能性が高いものと推測する。これに関連して興味深いのが、吉田文庫所蔵の「吉田社縁起型」の一本に、次のごとき奥書が見えることである。<sup>(17)</sup>

右縁起者、左金吾雅豊卿所レ被ニ書写ニ也。別有三二巻ニ者、近衛博陸公眞跡也。住持沙門玄智尊レ章ニ奥書ニ、因令レ馳ニ亮筆ニ訖。

元禄八年十二月廿一日左武衛卜部朝臣(花神)

ここから、これが飛鳥井雅豊の書写にかかるとともに、近衛基熙による書写本の存在も判明する。吉田文庫所蔵の他の現存本との対応関係など、詳細は不明とせざるを得ないが、吉田社に伝来した縁起が二種に大別できることや静嘉堂文庫本の外題を勘案すると、近衛基熙書写本をこの本とは別型式である「惣持寺縁起型」に分類することも可能であろう。この想定に誤りがなければ、遅くとも元禄八年の時点においては、「惣持寺縁起型」と「吉田社縁起型」の二種の新長谷寺縁起が対になって存在していたことになる。

これらと装いを異にするのが恩頼堂文庫本である。吉田社の縁起を冒頭に置くことから「吉田社縁起型」に近い関係にあるといえるも、意味の不明瞭な箇所や時代性を無視した記述も見え、「吉田社縁起型」に比して粗雑な印象を受け、また『験記』のごとき惣持寺の観音製作についても、言及するところがない。恩頼堂文庫本の特徴は、神宮寺としての由来が前の諸本に比して直接的に示される点にある。すなわち、山蔭の女である東三条院の母が長谷寺観音の化身であったがゆえに、春日神勧請に際して、彼女が神宮寺建立を祈申したとされ、諸本が山蔭を介して新長谷寺と吉田社を結び付けたこととは、大きな開きを見せている。また、神宮寺建立の祈申を受けた春日神からは、「建立せは長谷寺のごとくせよ」との言葉を受け、諸本と同様、頂上仏と宝冠の阿弥陀仏とが東三条院の母へと授けられるのだが、観音の体軀は阿弥陀の再誕とされた定朝の作と記され、本尊は「神と仏の真作」で「二丈六尺二分」の十一面観音像であるとの所伝が加わっている。さらに恩頼堂文庫本では、「山蔭新長谷寺に詣せん人ハ、やまとのはせへ(大和)七度参詣にあたるへし」と述べており、全体として長谷寺信仰を強く意識した構成をとっているといえよう。

『験記』の記載を全く参照せず、その一方で、このような二種の本が触れない独自の記事を含むのが恩頼堂文庫本の特徴といえるが、かといって他の縁起と無関係だったとは考え難い。前述のごとく、冒頭に吉田社縁起を配することからすれば、恩頼堂文庫本は「吉田社縁起型」に近いものといえようが、吉田社神宮寺としての性格が直接的かつ濃厚に表れ、同時に長谷寺信仰など信仰的要素もより強く意識されており、加えて、諸本に比して粗雑である点に鑑みれば、これが「吉田社縁起型」新長谷寺縁起の古体であった可能性は捨てきれない。この種の縁起をもとにして、流布していた『験記』を利用する形で再構成されたのが、「吉田社縁起型」であったと考えたい。『験記』の記事を組み

入れたことで、長谷寺観音の化身とされた東三条院の母の話や、山蔭と時代が一世紀ほど齟齬する定朝の話などは削除されざるを得なかったが、『験記』が「此観音ヲ写シ造」というように曖昧に記述していた本尊の記載を十一面観音像に巧みに読み替えて、長谷寺信仰との連関を表現することにも成功している。当然ながら、これと逆の現象が起こった可能性も高い。『験記』をもとに、この種の神宮寺説話を盛り込む形で形成されたのが、「惣持寺縁起型」新長谷寺縁起だったと推測する。『験記』と恩頼堂文庫本とが交流を重ねる中で、「惣持寺縁起型」と「吉田社縁起型」の二種の形にまとめられ、それらが吉田社に伝来したものと考え<sup>19)</sup>る。

ここまで新長谷寺縁起の展開を縷述してきたが、ここで、本稿の主題に戻って注視しておきたい事柄をまとめておく。一つには、新長谷寺が『験記』の惣持寺縁起の中、しかも後日譚の中で触れられたという点である。惣持寺縁起の叙述過程で、なによえ新長谷寺について閑説せねばならなかったかは必ずしも明らかではない。惣持寺が山蔭の子たちによって建立されたことは確かなのだから、山蔭の邸宅が吉田地域にあったとしても、説話的な観音像製作だけを切り離して吉田地域のこととして著述する必然性はなく、惣持寺となる地で観音像を造つたことに変更しても、大きな問題は生じないといえよう。翻って考えるならば、このことは、惣持寺の観音像製作を語るにあたって無視し得ない霊木伝承を持つ著名な観音像が、『験記』がまとめられる一三世紀以前より吉田地域に存したことを示唆するのではあるまいか。もう一つは、恩頼堂文庫本に窺えるような、『験記』の影響を受けない縁起が形成されていた事実である。その背景には、吉田社や長谷寺信仰と接近することで、自らの地位を向上させようとする新長谷寺側の意図を仄見える気がするが、<sup>20)</sup>一点目の事柄をも勘案すれば、『験記』に窺える観音信仰の寺としての新長谷寺の価値は、寺側が重視する神宮寺としての性格と必ずしも一致するものではないといえよう。中世前期における新長谷寺の信仰基盤は、神宮寺のごとき権威的な由緒とは別なところに存した可能性が高いものと考え<sup>21)</sup>る。

## 二 新長谷寺に見る吉田地域の信仰的世界

周縁地域の一寺院に過ぎない新長谷寺に関して、『験記』を始めとする説話が豊富に残された一方で、当然とい

えるかもしれないが、古記録や編纂史料には記載がほとんど見えない。寺が焼失した応仁の乱以前の史料は管見の限りで三点に過ぎず、寺の様相を知るには史料的な制約が伴う。それゆえ、残された史料を幅広い見地から分析することが不可欠となるのであり、以下では、管見に触れた三つの史料を掲出した上で、それぞれについて逐一検討を加えていくこととしよう。

A 『勘仲記』文永十一年（一二七四）一〇月一七日条<sup>(21)</sup>

吉田今長谷観音堂供養。在地人勸進、諸壇結構之。有舞態云々。

B 『鈴鹿家記』応永元年（一二三九四）二月二三日条<sup>(22)</sup>

御公家衆<sup>エ</sup>御礼太刀・折紙・鳥目百疋宛。鈴鹿隼人・大角筑前御俱祝八人・祢宜八人<sup>エ</sup>鳥目十五貫文被<sup>レ</sup>下。（中略）新長谷寺・吉田寺両人五百文・木綿一端宛被<sup>レ</sup>下。（後略）

C 『兼敦朝臣記』応永一〇年（一四〇三）三月二日条<sup>(23)</sup>

侍所土岐美濃入道常保送<sup>二</sup>制礼<sup>一</sup>二枚了。是先日内々申請之故也。即可<sup>レ</sup>打<sup>二</sup>大鳥居柱<sup>一</sup>一本相残之也。<sup>(大鳥居顛倒。但東并観音堂門之)</sup>旨、召<sup>二</sup>仰忠行入道<sup>一</sup>了。

### 禁制

一、馬牛社内へはなちいるへからさる事<sup>(一放入)</sup>

一、けいたいの家、他所へこほちいたすへからさる事<sup>(一放出)</sup>

右、このてうく<sup>(一系々)</sup>かたくちやうしせしむるものなり。もしいほんのともからあらは、その身をめしいたし、<sup>(一召出)</sup>さいくわにしよすへきよし、仰下さる、所也。仍下知如<sup>レ</sup>件。<sup>(一罪科)</sup>

応永十年二月 日 沙弥判

まずAであるが、新長谷寺の諸壇が在地の人の勸進によって結構された点からは、一三世紀後葉における在地社会との繋がりを窺える。「吉田今長谷観音堂」との呼称からも、新長谷寺の中心は観音堂であったと見るのが適当で、在地社会という観点からすれば、前章の末尾に触れた著名な観音像の存在との間に通底するものを看取できるかもしれ

れない。もつとも、在地の人による勧進といつても、勧進の一般的なあり方からすればその中心に勧進聖が存在し、そのもとで貴族や地下人が結集したと見るのが自然である。『勸仲記』の記主、勘解由小路兼仲は、一二世紀中葉に遡る堂舎を当該地域に有しており、このことから新長谷寺造営に関する在地社会の結集に関心を持って、自らの日記に記したものと推測される。ここで想起すべきは、『験記』にあった祇陀林寺に参籠して地藏菩薩の夢告から新長谷寺を再建したとされる聖人の存在である。一三世紀の吉田地域を見るならば、他にも勧進活動を検出することが可能であり、例えば、京と当該地域とを結ぶ鷹司河原橋が入道兵庫頭重房の勧進で造られ、仁治二年（一二四一）に延暦寺僧宗源によって供養された事例を拾うことができる。在地社会を巻き込んだ勧進聖の活動は、新長谷寺に限定されるような性格のものではなく、吉田地域全体のあるり方として理解せねばならないだろう。

ところで、聖人が籠もった祇陀林寺とは、鴨川を挟んで吉田地域と対峙する、東京極大路東、中御門大路南に所在した天台宗の寺で、延暦寺僧の強訴に際して集会の場や宿所としてしばしば利用された。吉田地域との関連でいえば、天台座主良源の弟子、仁康がその住寺とし、夢告に従い地藏菩薩像を造って地藏講を興したことなどが注目され、『験記』が述べる聖人とは、あるいは仁康をモデルにしたものかもしれない。仁康の師である良源は、貞元二年（七七七）に「不<sub>レ</sub>攀<sub>二</sub>登山嶽<sub>一</sub>之女人類」のため、神楽岡吉田寺に「建<sub>三</sub>立重閣講堂<sub>一</sub>、結<sub>二</sub>構数字雜舎<sub>一</sub>」して舍利会を開催しており、舍利会はその後、「京中ノ上中下ノ女ノ礼マセ不<sub>レ</sub>給又事、極テ口惜キ事」として、法興院と祇陀林寺でも催されることとなる。また、近世に著された新長谷寺縁起によれば、東三条院が長保三年（一〇〇一）に再興した際に、「慈惠大師の直弟恵心院の僧都（原住）を導師と」して法会が催されたとしており、これを忠実と認めることには躊躇されるものの、祇陀林寺・神楽岡吉田寺・新長谷寺の三寺の間に、天台座主良源を核とする繋がりを読み取ることが可能である。鷹司河原橋の供養会が延暦寺僧の手でなされた点をも併考すれば、Aの史料に見える在地の人の勧進とは、このような良源と吉田地域との関連に起源する延暦寺僧の影響下でなされた活動とも推察し得る。

一四世紀末のBの史料へと移ろう。ここでの新長谷寺は、吉田卜部家の元服に伴う礼物支給の対象として、吉田寺と並んで姿を見せる。吉田寺は、良源が舍利会を催して以降、史料上から痕跡を消す神楽岡吉田寺とするよりも、

『吉記』養和元年（一一八一）九月二日条が「次參中山觀音堂号吉田寺。々僧云、吉備大臣建立。」と記し、一二世紀後葉以降、七觀音巡りの靈場として散見する中山觀音堂と捉えるのが穩当である。<sup>30</sup> 中山觀音堂は、新長谷寺と同様、千手觀音像を本尊としていたが、七觀音巡りからも端的に知られるように、中世においては新長谷寺より多くの信仰を集めていた。その地理的な位置に関しては、中山忠親の邸宅に由来する中山家の墓所が、「在眞如堂西、去觀音堂良二町余上」ったこと、一四世紀後葉において、「中山寺門前小路」が「神樂岡山東面西類」を通過していたという事実から、神樂岡の南端、現在の神樂坂通（旧近衛坂）に所在したと見て大過はない。<sup>34</sup>

古記録や編纂史料にほとんど現れない新長谷寺に比べ、中山觀音堂に関して触れた史料は比較的多く残されている。その多くは、前掲の『吉記』のごとき觀音巡りに関するものだが、他にも、念仏僧として名高い永觀が、天永元年（一一〇〇）以前に「修迎接之講」した寺として「中山吉田寺」が登場する。<sup>35</sup> また、後に天台座主に昇りつめる尊意が、貞觀一八年（八七六）に仏の後壁に描かれた地獄絵を見て、「一歳にして「忽捨遊樂之心、即發入山之志」したとされる「鴨河東吉田寺」も、中山觀音堂に相当する可能性が高い。<sup>36</sup> 周知のごとく、神樂岡周辺には貴賤の墓が数多く造営され、この地は彼岸と此岸とが交わる場所と認識されていた。<sup>37</sup> 「迎撰之講」や地獄絵から窺える中山觀音堂の浄土信仰的な様相も、おそらくはこのことと関連していると思われる、これらに起因して、觀音の靈場として人々の信仰を集めるに至るのだろう。しかし、Bの史料で新長谷寺と並記されたことから、こうした性格を中山觀音堂の一寺の特色に帰してはならず、あくまで吉田地域の地域性として把握すべきと考える。Aで指摘した吉田地域における勸進聖の活動も、彼岸と此岸との交差する土地柄と切り離して論じることが許されないものと考ええる。

一五世紀初頭の史料であるCからは、内々の申請に基づき室町幕府から送られた禁制が、吉田社大鳥居の柱と新長谷寺觀音堂の門に打ち付けられたことを知る。このことは、新長谷寺が人々の往来する場に立地していたことを物語るが、それ以上に重要な点は、この時点において、吉田社と新長谷寺がある程度の親密性を築いていたことである。境内地に関わる禁制が出された背景には、永徳四年（一三八四）の足利義満による寄進を契機として、吉田社の境内地を確定していこうとする吉田地域再編の動きがあったと見てよい。<sup>39</sup> 新長谷寺が吉田社神宮寺の地位を殊更に主張す

るようになる時期については、慎重に検討せねばならないものと考えるが、このような吉田社の動向を重視すれば、その端緒をCと同じ時期に求めることも可能である。すなわち、吉田社が在地の人々の信仰対象であった新長谷寺と接触するようになり、一方で、新長谷寺が神宮寺としての権威を志向するようになるのは、一四世紀後葉から一五世紀初頭にかけてのことであったと考える。

以上、新長谷寺に関わる史料についての検討を行なってきた。管見に触れた史料はわずか三点に過ぎず、ここから何かを述べることは躊躇されるものの、これらを通じて新長谷寺のおよその変遷を読み取ることも不可能ではない。勧進の対象となるなど一三世紀において在地社会と強く結び付いていた新長谷寺は、一四世紀後葉の吉田社における境内地獲得を背景として、吉田社神宮寺への道に向かったものと捉えたい。新長谷寺が辿るこうした変遷は、換言すれば、地域全体の中で影を潜めていた新長谷寺の独自性が、寺の内外の動向に左右されて、中世後期にかけて顕在化してくる過程ともいうことができよう。前章で見た『験記』から新長谷寺縁起への展開や、惣持寺の観音像を模した像高三尺程度の千手観音像から、長谷寺式の巨大な十一面観音像へという本尊認識の変更も、こうした文脈で捉えるのがよいと考える。

また、Bの検討で触れたように、中世における当該地域の観音信仰としては、『験記』に窺える著名な千手観音像の存在は、新長谷寺よりも中山観音堂のものこそ相応しいとの推論へ行き着き、『験記』が混同ないしは意図的に改変した可能性も想定されてよい。しかし、繰り返しになるが、少なくとも中世前期においては、新長谷寺にしても中山観音堂にしても、個としての性格よりも地域と密接不可分な存在であったことが重要と考える。だとすれば、利益のある千手観音像を、新長谷寺所蔵のものとするか、中山観音堂に安置されたものと捉えるかは、当時の人々にとって副次的なものに過ぎなかった可能性も否定し得ず、彼岸と此岸とが交わる吉田地域に存在した観音像であることにこそ、信仰対象として第一義的な意義があったと見るべきなのかもしれない。個々の寺院や隠棲地的な貴族の邸宅・堂舎が一体となつて、吉田地域の信仰的な空間を現出させていたと把握するのがよいと考える。

### 三 新長谷寺・中山観音堂と行基の吉田院

前章では、新長谷寺に関する編纂史料・古記録を見てきたが、その過程で、中山観音堂の様相についても若干の検討を行なった。ここでは、新長谷寺にしろ中山観音堂にせよ、中世前期においては地域全体の中で位置付けねばならないことを指摘したのであるが、中山観音堂については、検討の過程で提示しなかった興味深い史料が存在する。最後に、この史料についての分析を通じて、中世吉田地域形成の歴史的前提を探ろうという本稿の課題に対して、一定の見通しを得たいと考える。問題となる史料を掲出する。

D 『百鍊抄』嘉禎二年（一二三六）六月二十四日条

中山観音堂辺、称行基菩薩遺骨、細瓶安置之。参詣之輩自由取出之。如粉物云々。

これより遡ること一〇箇月前の文暦二年（一二三五）八月、寂滅・慶恩を中心とする律僧や信徒らは、入滅して五〇〇年近くが経過した行基の墓所を、その託宣に従って掘り起こした。『生馬山竹林寺縁起』によれば、墓所からは八角の石筒が現れ、石筒中に二重の銅筒が納められており、内側の銅筒には銘が刻まれていたという。この銅筒銘が、一部が今に伝えられている行基の墓誌である。さらに銅筒の内部には、「如<sub>レ</sub>水瓶之無<sub>二</sub>小口<sub>一</sub>」き形の銀瓶があり、瓶の蓋には瓔珞が懸けられ、頸には「行基菩薩遺身舍利之瓶」と記した札が付されていた。瓶の中から発見された行基の舍利は、翌年六月に中山観音堂へと運ばれ、Dのごとく人々に対して開陳されることとなる。これ以外に行基の舍利が京で参拝に供した例は確認できず、その後、正嘉三年（一二五九）、弘長元年（一二六一）、同三年の三次にわたり、東大寺において供養会が催されることとなる<sup>11</sup>。

ここからも察せられる通り、中山観音堂での開陳は、舍利発見後のかなり早い段階での異例ともいえる事柄であった。それではなぜ、開陳に際して中山観音堂が選ばれたのだろうか。吉田地域にあっては信仰を最も集めていたといってもよからうが、京内や白河の寺々に比べるとやはり見劣りせざるを得ず、なにがしかの理由があったと見なければ、こうした洛外の寺が用いられたことを整合的に理解することができない。行基の舍利発見に律僧が携わり、このことに中山観音堂が浄土信仰を介して葬地と結び付くことを考え併せると、律僧の活動などの側面から検討を加える

余地もあるう。しかし、関連史料に恵まれてはおらず、現時点では確たることをいえそうにはない。けれども、間接的な理由との誹りは免れないものの、注目に値する事柄が一点存在する。それは行基が開設した四十九院の中に吉田院なる寺院が見えることである。

池溝開発や交通路の整備、布施屋の設置などを通じて布教活動をなした行基は、四十九院と通称される活動拠点の寺院を各地に残すこととなった。一二世紀後葉の『行基年譜』<sup>(43)</sup>が、「年代記」なる書を利用して年譜中に四十九院を挙げることは周知のところだが、その行年六十七歳（天平六年（七三四））の頃に、「吉田院 在三山城国愛賀郡」とあるのがここで問題としたい寺である。行基は、天平二年以降、活動範囲を平城京や和泉から撰津・山背へと拡大し、山背国にあつては、天平三年に法然（檜尾）・河原・大井・山崎の四院、同六年に吉田院、一二年に発菩提（泉橋）・隆福尼・泉福・布施・布施尼の各院を設置した。<sup>(44)</sup>吉田院に関しては、神楽岡の西麓をはしる古若狭海道との関わりで営まれたと捉えられ、この道は、北に行けば若狭小浜へ通じ、南へ行けば四十九院の一つで紀伊郡深草郷に所在した法然院へ至ったとされる。<sup>(45)</sup>

神楽岡西麓においては、一二世紀中葉の史料でも南北道の存在を確認し得るが、一方で神楽岡の東辺を通る道も存在した。『太平記』巻八、大徒寄・京都一事では、延暦寺僧が比叡山を下りて法勝寺に集結する様子を、「其勢ヲ見渡セバ、今路・西坂・古塔下・八瀬・藪里・下松・赤山口ニ支テ、前陣已ニ法勝寺・真如堂ニ付バ、後陣ハ未山上・坂本ニ充滿タリ」と表現する。今路や雲母坂から下山した僧徒等が、真如堂を経て法勝寺に至ったことからすると、彼らが神楽岡の東麓を通ったと見て間違いない。この道こそが、前章で見えた「神楽岡山東面西類」を通る「中山寺門前小路」だったのだろう。そして、神楽岡坂に面していたと思われる中山観音堂の地は、地理的な位置関係から見て、こうした神楽岡の東と西の道が近付いていく地点だったと捉えることが可能である。ここまでくれば、先の疑問も理解が可能となるう。すなわち、中山観音堂で行基の舍利が開陳されたのは、この観音堂こそが行基の四十九院の一つ、吉田院の後身と認識されたからに他ならず、京から最も近い行基の遺跡が、この中山観音堂だったことに由来していたものと考ええる。

さて、このことが認められるならば、吉田地域の様相に関わって、いくつかの事柄がより明瞭なものとなる。一つは、神楽岡が貴賤の葬地とされた点である。周知の通り、行基信仰と葬地とは親密な関係にあり、吉田院の存在と中山観音堂の浄土信仰とを結んで考えることができるならば、中山の地に関して「斯所有行基所定置之葬場也」と伝える『雍州府志』の説も、根拠のないこととして無碍に退けるわけにはいかなくなる。行基による吉田院の設置が葬送地の形成と関係し、葬送地となることが吉田地域の観音信仰や浄土信仰を生んだという流れを想定することは、かなり自然なものと考ええる。

もう一つは、前に注意を喚起しておいた新長谷寺と行基信仰の繋がりにある。すなわち『験記』によれば、新長谷寺となる仏所で千手観音像を造った長谷寺観音に対し、行基は「長谷ノ観音ヤヲワスル」と声をかけたという。長谷寺観音の開眼導師を行基とする『験記』の序などに端的に示されているように、長谷寺信仰もまた行基と繋がりがやすく、ここでの行基の登場はさして奇異なことではない。しかし、吉田院の存在を念頭に置くのであれば、『験記』の記載はさらに豊かな色彩を帯びることとなる。吉田院に由来する当該地域の行基信仰が、長谷寺観音に声をかける行基の姿を生んだと推測することもあながち誤りではないと考える。

中山観音堂においても行基との同様な繋がりを見出せる。中世史料では観音堂を吉備真備の建立とするのみだが、近世の地誌では、「開基行基菩薩、願主吉備大臣」として行基と結び付けられ、本尊の千手観音像についても、「然シテ人皇四十三代聖武帝ノ天平五年癸酉ニ、公帰朝セリ。遂於難波浦彼靈木ヲ得タリ。仍テ行基菩薩ト心ヲ合テ、千手ノ像ヲ造レリ。今ノ本尊是也」と記すこととなる。靈木が唐より渡ったとする点には、『験記』の記載との関連からも興味深いものが存在し、また、天平五年の真備の帰朝などは、天平六年の吉田院造営を考えると、偶然とはし難いほどの時期の近似を見せている。ここに記された伝承がいつまで遡るかにについては問題があるものの、それを描いた上で想像を逞しくするならば、吉田地域に存在した靈木による造像伝承を吉田院のこととして読み替えるべく、帰国年時の近い吉備真備が持ち出され、そのことが中山観音堂の吉備真備による建立という説を登場させたのかもしれない。いずれにせよ行基の吉田院は、その後の吉田地域の信仰において、深く根を下ろしていたと考えてよい。

ところで、『続日本紀』宝龜四年（七七三）一月辛卯（二〇日）条によると、行基の修行した「惣四十余処」の院は六院を残して、「或先朝之日、有<sub>二</sub>施入田<sub>一</sub>。或本有<sub>二</sub>三田園<sub>一</sub>、供養得<sub>レ</sub>濟」という状況で、残った六院についても、菩提院以下の五院に対しては寺田三町を、山崎院には二町を与えたという。これを参照すると、吉田院においてもこれ以前に二、三町規模の寺田が付されていた可能性が高い。中山観音堂の位置から推して、寺田は神楽岡西麓、南寄りの地に設定されたことだろう。そして、四十九院に寄せられた寺田には、興福寺領莊園となった菩提院の寺田や東寺領とされた石凝院など、後世にまで存続していくものがいくつもあり、なかには、隆池院（久米田寺）など、平安時代以降に拡大していく事例も見出せる。吉田院の寺領がどのような変遷を辿るかについては全く不明だが、こうした寺田のあり方をも考慮すると、吉田地域の展開に及ぼした吉田院の影響を、土地所有の側面からも補足できるかもしれない。

吉田地域においては、一二世紀中葉以降、貴族の邸宅・堂舎が活発に造営されるようになり、それまで「吉田野」と呼ばれた辺鄙な景観は様相を一変する<sup>54</sup>。その意味で、当該地域が展開していく画期を、南接する白河地域の開発が北へと延びた一二世紀中葉に置くことは妥当である。しかし、その信仰基盤とするところは、そこから四〇〇年を遡る行基による吉田院の造営であったと考えたい。吉田院の造営を契機に葬送地としての吉田地域が出現し、そこから新長谷寺や中山観音堂といった観音信仰・浄土信仰の寺が登場する。また、そうした信仰的な前提のもと、藤原山蔭の別荘が築かれて吉田社が勧請され、一〇世紀後葉には、良源が舍利会を行なった神楽岡吉田寺の整備がなされ、完成までには至らなかつたが藤原兼家がこの地で法興院の造営を始めることになる。そのような時代背景と隠棲地的な性格を有する邸宅・堂舎の林立とは、決して切り離して論じ得るものではなく、そうした前提をおさえることで始めて周縁地域の展開を歴史的に位置付けることが可能となるだろう。

## おわりに

本稿では、平安京・京都の周縁地域の展開を考えるにあたって不可欠な、その地域に内在する歴史的な特質について、吉田地域を対象を設定し、なかでも新長谷寺なる寺院を焦点をあてて考察を行なってきた。新長谷寺は、吉田社

の神宮寺であることに第一の特徴を有するが、縁起やわずかに残された編纂史料・古記録などを通じて検討していくならば、神宮寺たる權威を殊更に主張するのは一四世紀後葉以降に下る可能性があり、中世前期においては、当該地域が有した信仰的世界の中の一つの要素に過ぎないものであったと考える。そして、当該地域が全体として持つ信仰的世界は、八世紀前葉の行基の吉田院にまで遡ることが可能であり、それが基軸となつて、新長谷寺や中山観音堂といった千手観音像を本尊とする寺院が登場し、院政期には隱棲地的な性格の色濃い地として、確たる地位を占めるに至つたのである。つまるところ、八世紀前葉の信仰形態が、その後の展開過程の根底のところ、なお脈々と息づいていたと見ることができよう。

しかしながら前章の末尾に示した通り、吉田地域を景観という側面から眺めるのであれば、貴族の邸宅や堂舎が宮まれ、「野」としては把握されなくなつた一二世紀中葉という時期は、当該地域にとつてやはり画期と呼ぶべきものであり、前代に系譜する側面を強調し過ぎることは慎まねばならない。吉田地域における展開とは、それ以前からの信仰的世界を引き継ぎつつ、それをうまく利用する形で発展を遂げたものと考ええる。平安京周縁各地でなされた変容とは、このように地域に内在する事象を止場させる形で成し遂げられたものと考えたい。同時に忘れてはならないのは、新長谷寺において窺えたように、ある時期から個々の施設の独自性が顕著になつていくという変遷過程である。今まであまりなされることがない施設の独自性という観点から景観を捉える作業は、周縁地域の変容というだけでなく、平安京から生まれ出た中世都市京都の変質を考えていく上でも、留意すべき事柄となるだろう。

本稿では、前稿の不備を補う意味を持つて、周縁地域を考える素材として引き続き吉田地域を取り上げてきた。しかしながら、吉田地域がこうした分析の素材として好個な事例であつたかどうかについては、今なお不安が残る。それは、今後の諸地域の検討を俟つて解決していかねばならない不安であるが、それと同時に、周縁地域の展開を総体的に論じ、そこから平安京から京都への展開に一定の解を得ようとするのであれば、考察の対象を吉田地域に限つていては限界が訪れることも明白であろう。明らかにすべき課題はなお山積しているが、吉田地域に関する検討は、ひとまずここで擱筆することとしたい。

注

- (1) 『愚管抄』卷二、白河。
- (2) 『扶桑略記』応徳三年（二〇八七）一〇月二〇日条。
- (3) 拙稿「中世吉田地域の景観復原」（京都大学埋蔵文化財研究センター編『京都大学構内遺跡調査研究年報 二〇〇一年度』二〇〇六年）。
- (4) 『統史愚抄』応仁二年（二四六八）七月四日条。
- (5) 吉田社が応仁の乱後の再建時に神楽岡山上へと遷された事柄を想起すると、新長谷寺についても、応仁の乱以前から日降坂沿いに位置していたかどうかは検討の余地がある。
- (6) 『京都坊目志』上京第廿七学区（吉田町）之部には、「維新の際、廃寺として堂宇及び本尊を真正極楽寺に移す」とある。
- (7) 『長谷寺験記』の引用は、長谷寺所蔵天正一五年（一五八七）書写本を底本とする古典文庫本による。なお、『長谷寺験記』の成立時期に関しては、正治二年（二二〇〇）から承元三年（二二〇九）の間に置く永井義憲の説が通説的位置にあるが、これには藤巻和宏の批判が存在する。藤巻は、『長谷寺縁起文』や『長谷寺密奏記』の検討を起点として、成立時期を一三世紀後葉以降に下らせる。藤巻の説を検証するだけの準備はないため、さしあたり今は永井の見解に従っておくこととしたい。永井義憲「解説」（『長谷寺験記』新典社、一九九二年）、藤巻和宏「『長谷寺験記』成立年代の再検討―長谷寺炎上と「行仁上人記」―」（『国文論叢』三六、二〇〇六年）。
- (8) 『今昔物語集』の他に、『十訓抄』卷一、『三国伝記』卷二七、山蔭中納言惣持寺建立ノ事、『峯相記』などに記される。なお、『三国伝記』では、「納言在生之時、件ノ仏所ノ跡ニ観音ヲ写シ造。今ノ洛陽東山吉田ノ今長谷是レ也云云」と新長谷寺について『験記』と同様な記載を持つ。
- (9) 星田公一「今昔物語集の山蔭中納言説話の形成と影響」（『同志社国文学』九、一九七三年）、「山蔭中納言説話の成立―『長谷寺観音験記』の場合―」（『同志社国文学』一一、一九七五年）、築瀬一雄「山蔭中納言物語考」

〔説話文学研究〕三弥井書店、一九七四年）、菅野扶美「山蔭中納言ノート」〔梁塵 研究と資料〕一、一九八三年）、池上洵一「藤原山蔭説話の構造と伝流」〔講座平安文学論究〕四、風間書房、一九八七年）、黒嶋敏「伊達氏由緒と藤原山蔭」〔日本歴史〕五九四、一九九四年）、金谷信之「総持寺縁起と鉢かづき物語の史的背景」〔関西外国語大学研究論集〕六七、一九九八年）、日沖敦子「受け継がれる山蔭像―流布本系『鉢かづき』を中心に―」〔人間文化研究〕二、二〇〇四年）など。

(10) 『朝野群載』巻一、文筆上には、延喜二二年（九一二）に鑄造された惣持寺の鐘銘とともに、「納言藤原山蔭尊考、軫二先業之不レ遂、歎二善因之未レ成、多以二黄金、附三入唐使大神御井、買三得白檀香木、造三千手觀世音菩薩像一レ体。仍建二衢場於摂津国島下郡、安三置此像号三総持寺」との記述が存在する。『験記』の記載は机上のみで作られたのではなく、中国に靈木を求めて千手觀音像を製作し、惣持寺に安置したのは史実であつて、これに脚色を加えて説話化したものと見ることができよう。

(11) ここである「当寺」は、『験記』の通例からすれば長谷寺を指すと見るのが自然だが、惣持寺縁起中の文章であることを思えば、惣持寺を指すとも考えられる。

(12) 「新長谷寺縁起」(天理大学附属天理図書館吉田文庫所蔵、吉三四―七六)。

(13) a 「吉田山新長谷寺縁起」(天理大学附属天理図書館吉田文庫所蔵、吉三四―六八)、b 「新長谷寺縁起」(同文庫所蔵、吉三四―七七)、c 「新長谷寺縁起」(同文庫所蔵、吉三四―七八)。なお、この三本の相互関係については、改行位置や仮名と漢字の遣い方、文字の訂正などから、aを親本としてcを用いて校訂したのがbであることが判明する。

(14) 「新長谷寺縁起」(静嘉堂文庫所蔵、丙函―一・二架―山)。

(15) 「吉田神宮寺新長谷寺縁起之文」(四天王寺国際仏教大学院図書館恩頼堂文庫所蔵、一一四五)。当文庫の概要については、須原祥二「猪熊信男と恩頼堂文庫について」〔殖生野〕二、二〇〇三年）など参照。

(16) ここに見える「錦所」とは、吉田社社司で藤井貞幹に師事した山田以文の号であり、ここから、静嘉堂文庫所

蔵本も吉田社伝来の諸本と親戚関係にあったと推測される。

(17) 前掲 (13) c 「新長谷寺縁起」。

(18) 恩頼堂文庫本では山蔭の女と記されるが、史実では山蔭の孫、時姫が相応しい。なお、恩頼堂文庫本に見える「円融院第一の一条院。御母東三条。太政大臣兼家公第二御女。永観二八月、五歳にて東宮。永延元、御位につき給。正暦五、后御入内。女御五人の第三脩子准后。御母山陰女」という内容も、必ずしも史実と合致しない。あるいは錯簡や誤写を想定すべきかもしれない。

(19) なお、恩頼堂文庫本は吉田兼俱が文明一三年（二四八一）に偽造した藤原道長の書状を引載しており、現在の形になった時期は一五世紀後葉を遡らない。また、いうまでもないことだが、ここで考えている恩頼堂文庫本の成立時期とは、現存本の書写された時期と同義ではない。

(20) 新長谷寺が吉田社神宮寺であることについては、『拾遺都名所図会』が「寺説曰、春日社の神宮寺也」と述べているように、寺側からの主張が強かったと考え得る。

(21) 翻刻は、高橋秀樹「広橋家旧蔵『兼仲卿曆記』文永十一年」について（『国立歴史民俗博物館研究報告』七〇、一九九七年）にある。

(22) 改定史籍集覧二四所収。内閣文庫所蔵本（一六二一—一八二〇）も参考にした。なお、『鈴鹿家記』に関しては史料の信憑性に問題が存在し、その記載を扱うには慎重な態度が必要である。

(23) 東京大学史料編纂所架蔵写真真帳（六一七三—四三三）による。以下、『吉田家日次記』の引用は全てこの東京大学史料編纂所架蔵写真真帳に基づくものである。

(24) 拙稿前掲（3）論文。

(25) 『百練抄』仁治二年（一二四二）二月一日条。

(26) 『扶桑略記』長暦三年（一〇三九）二月一日条、『中右記』康和四年（一一〇二）五月九日条、長治二年（一一〇五）正月一日条、同年一〇月二九日条、『永昌記』長治二年正月一日条、『玉葉』安元三年（一一七七）四月

一三日条など。

(27) 『今昔物語』卷一七一—一〇、僧仁康折念地藏<sub>二</sub>遁<sub>二</sub>疫癘難事、『地藏菩薩靈驗記』一—一七。

(28) 『日本紀略』貞元二年(九七七)四月二日条、『天台座主記』権律師良源、『今昔物語集』卷二一九、比叡山行<sub>二</sub>舍利会<sub>二</sub>語。

(29) 拙稿前掲(3)論文においても述べたように、吉田地域における良源の影響力の背景には、藤原兼家との繋がりがあつたものと考ええる。

(30) 七観音巡りの中で中山観音堂を訪れた事例は、『吉記』以外にも、『愚昧記』仁安三年(一一六八)五月二日日条、『兼敦朝臣記』応永九年(一四〇二)一〇月一八日条、『経覚私要抄』長祿四年(一四六〇)一〇月四日条、『二水記』永正一七年(一五二〇)閏六月一七日条などがある。なお、『宣胤卿記』文龜元年(一一五〇)一〇月一八日条には、「観音別課。観音經三十三卷、心經一卷、弥陀聖号三百反。参詣中山・今長谷寺等」とあるが、「等」の字に重きを置けば、「中山今長谷寺」と続けて一つの寺と見るよりも、中山観音堂と新長谷寺とが並記されていると解するのがよからう。

(31) 『拾芥抄』下、諸寺部、三十三所観音に、「中山<sub>千手、吉備大臣。</sub>」と記される。中山観音堂にあつた千手観音像は、近世に金戒光明寺に移されて現存している。

(32) 『薩戒記』応永三三年(一四二六)七月一四日条。

(33) 『兼右卿記』天文二年(一五三三)一月一八日条所引「至徳元年(一一三八四)一〇月二日付左弁官下文」。

(34) 中山観音堂の位置について、「元在<sub>二</sub>近衛坂南、善正寺西<sub>一</sub>」とする『山城名勝志』の記載は妥当なものとしてよい。杉山信三「吉田寺について」(『史迹と美術』一四二二、一九五四年)参照。

(35) 『拾遺往生伝』下、権律師永観。永観に関わる事績については、井上光貞『新訂 日本浄土教成立史の研究』(山川出版社、一九七五年、三八五—三九三頁)、五味文彦「永観と「中世」」(『院政期社会の研究』山川出版社、一九八四年、初出一九八三年)に詳しい。

- (36) 『尊意贈僧正伝』。
- (37) 早くも貞観八年(八六六)には、「山城国愛宕郡神楽岡辺側之地」への埋葬が、下鴨社に近いとの理由で禁止される。『日本三代実録』貞観八年九月二日甲子条。中山と葬地の関係については、勝田至「『京師五三昧』考」(『日本中世の墓と葬送』吉川弘文館、二〇〇六年、初出一九九六年)に詳しい。
- (38) 『兼敦朝臣記』応永一〇年(二四〇三)一〇月一日条からは、大鳥居が「今宮拜殿前」に存在したことが判明する。
- (39) 「永徳四年(一三八四)二月二四日付足利義満寄進状」(國學院大學図書館所蔵吉田文書、四)。境内地確定の動きと吉田神道確立への動向とが連動することについては、拙稿前掲(3)論文で触れた。
- (40) 吉田社神宮寺の初見史料は、『鈴鹿家記』貞治三年(一三六四)正月八日条であるが、それが新長谷寺を指すと断定できず、『鈴鹿家記』の信憑性についても考慮すべきである。
- (41) 『東大寺統要録』供養篇、『統史愚抄』弘長三年(一二六三)三月二五日条。行基の舍利の発見から舍利供養会に至るまでの流れについては、井上薫『行基』(吉川弘文館、一九五九年)などに詳しい。
- (42) 行基の墓所の発掘と律僧との関係については、細川涼一「大和竹林寺・般若寺・喜光寺の復興」(『中世の律宗寺院と民衆』吉川弘文館、一九八七年、初出一九八一年)参照。
- (43) 井上光貞「行基年譜、特に天平十三年記の研究」(『日本古代思想史の研究』岩波書店、一九八二年、初出一九六九年)。
- (44) 吉田靖雄『行基と律令国家』(吉川弘文館、一九八七年)。
- (45) 足利健亮「京都盆地東縁の南北古道―推古、道登・道昭、行基、秀吉らとのかかわりから見た―」(『環境文化』五八、一九八三年)、吉田靖雄前掲(44)書(二二五―二二六頁)。
- (46) 『兵範記』久寿二年(一一五五)五月二〇日条によると、源師子改葬において、「自近衛末東行、自神楽岡迎北行、至于北白河」っている。

(47) 五来重は、行基の四十九院に必ず墓地・火葬場が付随することから、行基の集団と三昧聖との系譜的連続性を読み取る。五来重「遊部考」(『仏教文学研究』一、一九六三年)、『葬と供養』(東方出版、一九九二年)。

(48) 『山州名跡志』巻四。

(49) 吉備真備の帰朝は、『統日本紀』宝龜六年(七七五)一〇月壬戌(二日)条によれば天平五年とされるが、この記事は、遣唐使の帰朝時期などと考え併せて天平七年と校訂されるのが一般的である。『山州名跡志』が採用した伝承は、『統日本紀』の本来の記載を参照して形成されたものである。

(50) 吉川真司「行基寺院菩提院とその寺田」(蘭田香融編『日本古代社会の史的展開』塙書房、一九九九年)、吉田靖雄前掲(44)書(二一〇～二二二頁)。

(51) 拙稿前掲(3)論文。

〔付記〕本稿は、科学研究費補助金(若手研究(B)「部類記の調査に基づく宮廷儀礼変容過程の基礎的研究」)による成果の一部である。

(京都教育大学講師)